新　刊　Book reviews

□宮脇　檀・中山繁信（編），栗原宏光（写真）：**神々と出会う中世の都市カトマンドウ**　A5. 241 pp. 2012.（株）エクスナレッジ．￥1,800+ 税．ISBN 978-4-7678-1266-3.

建築家グループによる，カトマンズ盆地の王宮・寺院・民家の調査研究の記録．職業柄，非常に綿密な街路図，配置図，建物の構造図などを見ることができる．写真もプロの手になるもので，美しい．

植物分類学の本誌に，お門違いなこういう本を紹介するのは気が引けるが，調査に出るたびに見慣れてしまった，町の建物の配置や内部が，こんな構造と意味を持っていたかを知ることは，これから先ネパールの人達とつきあう上で，基本的教養として大事だと思う．町のあちこちで目にする縁側のような空間は，老人が一日日向ぼっこをしていたり，行商人が品物を並べたり，夜は近所の人達が集まって御詠歌のようなものを延々と歌っていたり，旅人が一夜を明かしたりしているが，そういう誰でも利用できる空間が，ふんだんに用意されているのが，カトマンズの建築の一特色なのだそうだ．反面，著者らは専門だけあって，民家の内部構造を実測調査しようとしたが，ほとんどの場合拒否されたという．それも単にいやがるのではなく，決然たる「拒否」で，仕事の手伝いに参加してくれたインテリでさえそうだったという．たとえ一家の経営を握っている息子が「まあ，いいか」と言っても，歳とった母親が血相変えて断固拒否する事例もあったそうだ．われわれが調査に出て，何の気なしに民家や寺院に首を突っ込んだり，チョウタラのような構造物に脚を掛けたりするとき，周囲からそういう目で見られているのかも知れない．そういえばミャンマーで，小さな祠に立ち入ろうとしたら，遠くで見ていたタクシードライバーに，「靴を脱げ！」と怒鳴られたことがある．

カトマンズ旧市内の谷間のような小路を造る「高層建築」が，集合住宅であるとは心得ていたが，一族郎党の大家族が，仲良く部屋を分け合って暮らしているものと思っていた．ところが実際には，一家族単位ごとに「縦に」独立しており，「隣家」へ行くには一旦一階へ降りてから，あらためて「隣」へ入り直すという．途中の階には，隣家へ行く通路はないのだそうだ．一階はわれわれもお馴染みの，店舗だったり家畜小屋だったりで，誰でも出入りできる．二階は居間や寝室，三階は祭壇や居間，四階か五階が最も神聖な竈，調理場，食事室で，ここへは家族でも靴やベルト（つまり革製品）を外して入るのだという．とくに，竈の周辺は神聖さが高い．ネパール人同士でも（本書ではネワールに限定しているが），カーストによる差別があるようだ．さらに上の階があれば，物置や居室，屋上は採り入れた作物その他の日干しや調製に使う．だから他家へ行くには一階か屋上しか通路が無く，自家の部屋から部屋への移動は階段の上下しかない．とくに（このことは書かれていないが），台所が最上階にあるので，毎日使う水を壺に入れて運び上げねばならない．これは女性の仕事だから，大変な労働である．子供や兄弟が新しい家庭を持って，二家族独立に生活したければ，それまでの居住空間を「縦に」仕切るのだそうだ．この仕切りは極めて徹底していて，窓の真中に壁を造っている家さえあるという．だから「一家」の形はだんだん細長くなり，これに伴って階段を作り替える必要が生じるので，スペース節約のため，しまいには梯子のようになるという．

その他，漫然と眺めていたカトマンズの建物群について，われわれが気付かなかった，たくさんの情報を与えてくれる．観光旅行では，こんなことは教えてもらえないだろう．

（金井弘夫 H. Kanai）

□高橋秀男（監）：**葉っぱで見わける　樹木ハンドブック**　B5. 255 pp. 2011（出版年は奥付になし）．池田書店．￥1,250+ 税．ISBN 978-4-262-13624-0.

私が奥付と言うのは，本書の最後の頁 (255 頁の次頁) なのだが，ここの記事では奥付に相当する情報は不十分だと思う．ブックカバーの袖に，奥付に相当する記事があるが，カバーというものは本体とは別物と思う．近ごろは「奥付」を付けるべき法的根拠がないのだそうだが，奥付の表示形式と必要な項目を，出版界が協定してほしい．本書では監修者名があるのに編著者名がなく，誰の作品かわからないのも困ったものだ．

1 頁に 1 種類が割りつけてあり，葉の表裏のスキャナ画像がある，表と裏では縮小率が異なるた

め，それが一々％表示されていて，表紙やカバーには，ミリの目盛りがついている．識別形質は葉の形7件，葉の縁2件，葉の脈2件，葉のつき方3件，落葉/常緑2件で，それぞれマークが決めてあり，5頁に示された流れ図に従って，トーナメントスタイルの分岐図を逆順に（右から左へ）たどって行くと，多くて4ステップの左端に該当頁の範囲が示されている．植物の配列はこの仕分けに対応していて，従来の図鑑のような「系統的な」ものではなく，科・属・種といった纏まりもない．図鑑を使う目的の第一は「名前を調べる」ことなのだから，従来の「系統分類」的な検索表で，論理的に無理な「飛び越し」をせずに済むのがよい．しかし正解に行き着いたかどうかは，網羅的な図鑑を参照する必要があるだろう．このとき問題なのは，形質の定義があいまいで，例外が多いことなので，用語の整理と再定義が必要である．

こういう検索スタイルの図鑑が，最近にわかに目につくようになり，なにやら「先を争って」という印象で慌ただしい．落ち着いて，誰にでも使える検索形質の整理と定義を工夫して欲しいものだ．頁の端に検索形質のシンボルマークがならべてあるが，これをどのように使うのか，私にはわからない．（金井弘夫 H. KANAI）

□宮入芳雄：**ぼくは高尾山の森林保護員** A5. 174 pp. 2014. こぶし書房．￥1,800+ 税．ISBN 978-4-87559-283-9.

東京西郊の高尾山は，都民の行楽地として名高く，植物採集や自然観察の場所としても有名である．特に最近はミシュランの三星をもらったために，それ迄なかった，団体ツアーの対象に組み込まれて一層人出がふえ，ハイシーズンには一日7万人もがやって来ることもあるそうだ．それに伴って迷子（大人の）やけが人も増加している．森林保護員の仕事は，森林の生物多様性を保全しつつ，通行者の安全を計るのが目的である．公園内の枯れ枝が落下して通行人がけがをしたという事例でも，「管理が悪い」と，国が敗訴するご時世なので，そういう点にも目配りしながら，その日の担当地域を見て歩く．対象範囲は結構広く，南高尾から，中央線を越えた小下沢や八王子城山におよび，今は歩かれない踏み跡や旧時代の遺跡もある．

見開き2頁で一つの話題を扱っており，ごく軽いタッチの随筆的な書き方で，自然の移り変わりや動植物の生態を語る．対面頁はそれについての写真だが，コマーシャル写真を業としていた著者だけに，動植物や人間を含めた自然の有様をきれいに捉えている．本当は二つの仕事を両立させるつもりだったが，高尾山は意外にも携帯電話が繋がりにくく，元の商売は注文をとれなくなったという．

高尾山にはブナとイヌブナがあるが，ブナは結実するものの，すべて「しいな」なのに対して，イヌブナはよく発芽し，その実生はエリマキトカゲと呼ばれるそうだ．高尾山には紅葉するモミジ類は少なく，薬王院や登山鉄道が，元来は自生していないイロハモミジを植えて，観光客の期待に応えているとのこと．仕事がら，四季にわたって高尾山周辺を歩いているので，我々の見たことのない幻想的な景観もある．

最近の新聞記事によると，高尾山麓で温泉試掘に成功したそうだ．そういえば，数年前に行ったとき，駅のすぐそばで掘削の櫓を見た覚えがある．来訪者はますます増えるだろう．いまに自然保護のために，入山料をとることにならねばよいが .... 高速道の高尾山トンネル掘削の際，「自然を守る会」は天狗やムササビまで動員して反対運動を展開したのに，温泉掘削については，知っていながら音無しの構えだったのはなぜだろう．渓流沿いの観察路として有名だった6号路は，「源流の美」が見どころの一つだったのだが，その源流が涸れてしまったのに，ちっとも話題にならないのも不思議である．（金井弘夫 H. KANAI）

□本多郁夫：**知るほどに楽しい植物観察図鑑** B5. 169 pp. 2007. 橋本確文堂．￥2,400+ 税. ISBN 978-4-89379-110-8 C0045 ￥2400E.

先に紹介した植物生態観察図鑑おどろき編の，先行作品である．主として草本23種類について，鮮明な拡大写真，顕微鏡写真を多用して，スズサイコの花に虫が捉えられてゆく有様や，テイカカズラの種髪が中空であることなど，これまで見たことのなかった映像を提供してくれる．ムラサキケマンの雄蕊と雌蕊の関係などは，私も観察した覚えはあるが，他人に解説できるほどの理解には達しなかった．既報の作品と共に，お勧めする．

入手法について，発行所の橋本確文堂に電話で送料や送金法等につき問い合わせたら，「書店を

通じて註文すれば，送料が省ける」というニュアンスの返事だった．そこであらためて書店に依頼したところ「在庫がない」ということで，不首尾に終わった．そこで本書の編集を担当した，橋本確文堂編集部の若井氏にお尋ねしたところ，「完売して，当社には残っていない」そうで，後日著者の本多氏にご連絡くださり，そちらにはまだ40部ほど残っていることを，お知らせいただいた．

私が手にした本は某編集者から送られたもので，今更もう一冊を入手する必要はなかったのだが，これには「追加情報・正誤表」として，7枚の片面刷りの頁が挟み込まれていた．これは著者が，本書出版の後で追加したものと思われるので，それを確かめようとしたのだ．追加の内容は「ホタルブクロ（p. 67. 図入り 23 行分），スズサイコ（p. 64, 13 行分），マムシグサ（p. 21, 4 行分＋図 24 行分），コラム 蔓の右巻き•左巻き（p. 86, 8 行分），ムラサキケマン（p. 25, 20 行分＋図 10 行分），本書に出てくる昆虫の名称について（3 件），である．最後の 3 件は，正誤表というより追加情報と言うべきものと思う．私が気にしたのは，著者のホームページでは，これらの追加情報はそれぞれしかるべき位置に既に埋め込まれているのだろうが．印刷物にこれらの情報を取り込んだら，本書の内容や頁付けが変わってしまうだろう，ということだった．もし引き続き本書の第二版を刊行するときには，新 ISBN と共に表題も多少なりとも変える必要があるのだろうか？

ISBN コードは，世界中の出版物を共通の規則の下で識別整理して，流通の便をはかるためのもので，一つのコードは一つの文献を特定し，かつその内容が変化しないことを保証するために作られている．コードを申告するのは著者，出版社，発行者のいずれでもよいが，一度与えた番号は変更できない．もし同じ文献の内容が変わったときには，軽度の正誤や形式の変化をのぞいて，あらためて別な番号を与えねばならない．つまり，再版は同じ番号でよいけれど，改訂版には別な番号を与える必要がある．このことは，「利用の手引き」（これについては別途紹介する）の中で，くどいほど念を押されている．だから今回のように，著者自身の意志だからといって，内容の変更はしてはならないのである．公刊してしまった文献の修正は，前記した微細な変更以外は，あらためて全体を作り直し，新たな ISBN コードを与える必要がある．そういう注意を払っておかないと，後世の人たちが安心して文献を参照したり，引用したりできない．本書でも追加情報として，猪野俊平 : 植物組織学 (1964) の図が引用されているが，建前としては，1964 年発行の同書の図は，その後変更されていないという信頼関係に基づいており，さらにその図は，猪野が引用した Coulter & Chamberlain のそれと同じであることを保証されているからこそ引用できるのである．「アマチュアの仕事にそんなに目くじらを立てなくても...」と言われることは承知しているが，昨今のように誰もが高度のテクニックをもち，ホームページでは前記の変更は苦もなくできるうえ，自費出版で立派な本を作れる時代になると，文献の信頼性を保つにはどうすればよいのかに皆が気がついてくれないと，後日混乱を招くだろう．というより，折角の新知見が，日の目を見ることなく忘れ去られてしまうおそれがある．これは ISBN を使うか否かに関わらず，著者自身が配慮せねばならない問題と思うので，これ迄も意地悪くアラ探しをしてきた．

「ではどうすればよいのか？」と尋ねられたら，「そういう新知見や変更は，正誤も含めて，同好会誌や研究会誌のような定期刊行物に，一先ず発表してくれ」と言おう．そうすれば，その知見が自分のものだということを，日付つきで公表できるし，断片的にせよ自著の欠を補ってくれる．たとえば植物研究雑誌は，購読者でなくても投稿できるし，短報的なものがあってくれれば，編集の自由度が増してありがたい．そういうところへ出した作品を，時が来れば回収して，自分の成果として取り込めばばよい．本誌をはじめ多くの場合，投稿者は著作権の移管を求められるので，その利用に当たっては，自己の作品でも著作権利用の手続きが必要だが，まさか雑誌側が NO とは言わないだろう．そうやって改訂増補した作品は，前巻とは内容が異なっているので，同じ表題や ISBN で発行しない方がよいから，新たな番号と表題を申請せねばならない．そんな面倒は御免だと思うなら，ISBN なしで自費出版しても一向にかまわない．「出版物には必ず ISBN をつけろ」という法律はない．ISBN は流通の便宜のために，世界中の出版業界が協定したもので，「これが無ければ出版してはならない」というものではない．

ISBNが命名規約に取り込まれたため，「それがないと研究成果を発表できない」という空気が拡がるのを恐れる．命名規約でも，電子媒体上の学名の扱い以外のことでは，ISBNのしばりは及ばない．それが出版物全般に拡張されて義務づけられることを「言論統制」につながるとして，一部の人たちが懸念しているのである．ISBNなしの自費出版は，自己責任で遠慮なくやればよい．自費出版の作品は，「後世の他人が使う」と言う点についての配慮が足りないことがしばしばあり，これ迄も気付いた点は，その都度指摘してきた．

上に述べた「追加情報・正誤表」は，私の知るところでは，すでに二回，日付なしで発行されている．著者はこれらを購読者に直接送ることで，周知をはかるおつもりのようだが，これでは大多数を占める店頭購入者には行き届かない．やはり平行して，定期刊行物上でも発表しておかれるよう，お願いする．

前記の理由で，本書はすでに店頭では入手できないが，著者の手元にはまだ残っているし，ホームページの一覧だけでも得るところが多いと思うので，連絡先を記す．[redacted] 石川県野々市市[redacted] 本多郁夫　ホームページ：石川の植物 http://w222.nsk.ne.jp/-mizuaoi/　E-mail: mizuaoi@p2222.nsk.ne.jp

（金井弘夫 H. KANAI）

□野外植物研究会：**創立八十周年記念**　DVD. 2015. 同会．￥5,000. ISBN no number.

野外植物研究会は1935（昭和10）年に檜山庫三氏が植物趣味の仲間を集めて創った会で，同年から会員相互の知識の交換のために会誌，「野草」(ISSN 0912-2451) を発行した．「野草」はそれ以来，終戦を挟む1944（昭和19）年4月～1946（昭和21）年9月を休刊にしたのみで，月刊，あるいは隔月刊（最近は高齢化による会員減少で年2冊）で連綿と出版され，2014年12月で80周年を迎えた．「野草」には149回続いた檜山氏のボタニカルノートをはじめ会員の観察記録，専門家の寄稿などが載っており，図鑑等では得難い知識の宝庫である．故前川文夫博士は「野草」に載るアマチュアの観察記録に非常に関心を持っておられた．

本DVDは「野草」の創刊号から2014年1月の550号までのバックナンバーを収めたもので，会員の加藤僖重氏と㈱橋本印刷の努力で，著者と記事のタイトル，あるいは植物名から該当する記事をすぐに見ることができるので，非常に便利である．DVDは以下のところより購入できる．[redacted]神奈川県川崎市麻生区[redacted]方　野外植物研究会 Tel. 044-[redacted]

（指田　豊 Y. SASHIDA）